

『相撲のルーツは四隅突出型墳丘墓だった』

たかみやしんじ

平成30年(2018年)4月4日に「事件」が起きた。京都府舞鶴市で行われていた大相撲の春巡業で、多々良良三舞鶴市長が土俵上で倒れるという事態が発生したのである。しかしながら、ここでいう「事件」とはそのことではない。その時、相撲協会の関係者とともに医療関係者とみられる観客の女性が土俵上にかけて救命処置を行ったところ、観客の一部から“女性が土俵に上がっていいのか”というヤジが飛んだため、動転していた場内アナウンス係は数度にわたり“女性は土俵から降りて下さい”と放送を繰り返してしまったのである。

この模様が全国ネットのTV放送で放映されるや、ネット上では、“人命救助と伝統とどちらが大事か”、“女性差別ではないか”など非難が相次ぐこととなった。このため、日本相撲協会では正式に謝罪文を発表するとともに、土俵に女性が上がれない所謂「女人禁制」問題について有識者の意見を聞き、男女市民への意識調査を実施する方針を決めたのである。

この大相撲の「女人禁制」問題は過去にも幾度か物議をかもしている。平成2年(1990年)初場所、海部内閣の官房長官であった森山真弓氏が内閣総理大臣杯の授与を希望したが、時の二子山理事長は“土俵に上がっての授与は遠慮して欲しい”と要請した。平成12年(2000年)2月、大阪府知事に就いた太田房江氏が春場所千秋楽の表彰式で大阪府知事賞を直接手渡したい意向を示したが受け入れられず、府知事側が折れる形で決着した。

ひと頃、「山ガール」とか「歴女」という言葉が流行語になったりした。主として男性の活躍する領域と思われていたところに女性の活躍が目立ってきたことから言われ出したのであろう。それらの中に、「スー女」というのがある。相撲女子を略したものであろう。大相撲観戦に行くと、一昔前とは異なって黄色い声援が目立つことが実感できるのではないだろうか。又、東京の両国国技館には所謂「顔ハメ看板」(観光地などにある顔の部分をくりぬいた写真撮り用の看板)があり、人気力士である遠藤関が被写体を抱っこしている写真が撮れるようなものが幾つか設置されている。これは、明らかに女性客を意識して設置されているものと思われる。

本稿では、相撲のルーツを尋ねながら主として弥生文化の伝播について論じようと考

えているが、記述を進める中で若しかすると「女人禁制」のよって来るところにも言及する場面があるかも知れないと思っているところでもある。

序章 「隠岐古典相撲」

「隠岐古典相撲」は島根県隠岐郡で行われる相撲大会のことである。

島根県隠岐郡は島根半島の北方50 Kmに位置する隠岐群島で、島前三島と言われる知夫里島（知夫村）、中ノ島（海土町）、西ノ島（西ノ島町）と島後と言われる隠岐の島町の三町一村で構成される。ほぼ全域が大山隠岐国立公園に指定されており多くの景勝地を誇るが、中でも西の島町に所在する国賀海岸は高さ100mから257mに及ぶ日本一の海食崖で著名である。

時代を遡れば「古事記」に記述される「因幡の白兔」神話の舞台の一つである淤岐嶋は当地隠岐島とする説が有力である。又、隠岐島は古来流刑地としても度々歴史に登場する。承久3年（1221年）、後鳥羽上皇が鎌倉幕府執権の北条義時に討伐の兵をあげて敗れた「承久の變」の後上皇は隠岐に配流されている。元弘元年（1331年）、後醍醐天皇の倒幕計画が発覚し、天皇は捕らえられ隠岐島に流される。世に言う「元弘の乱」である。

この隠岐の島に「隠岐古典相撲」が伝わる。島根県公式プロモーションサイトを紐解くと次のように記述されている。

“日本の国技「相撲」。もともとは五穀豊穰などを願う祭り「奉納相撲」として行われ、神々に敬意と感謝を表すためのものであった。隠岐では、神社の遷宮や学校の開校記念など、島内で祝い事がある時に「古典相撲」が夜を徹して行われている。起源は定かではないが、江戸時代の文献に隠岐一宮「水若酢神社（みずわかすじんじゃ）」の20年に一度の遷宮で奉納相撲（宮相撲）が開催されたとの記述が残っている。”

“古典相撲は、祝い事や神社の遷宮の地域を「座元」、その他の地域を「寄方」とし、東西に分かれて取り組みを行う。横綱はなく、古式に沿って大関が最高位、関脇・小結と続く。役力士に選ばれることは島の男たちにとって名誉なことで、ただ力が強いだけでなく「心技体」が備わった実力者が選ばれる。地区の推薦を経て「寄方」の総会で決定されるため、各地域の思いを背負って勝負を行うこととなる。”

この「隠岐古典相撲」、明治時代から昭和にかけて島内で祝い事があった時、島をあげて盛大に開催されていたが、高度経済成長期に入ると若者が島外に流出するようになったことから活気が失われ、昭和30年代後半の大会を最後に行われなくなった。しかしながら、これを憂えた地元出身の実業家の提唱により、地元相撲愛好家や相撲経験者などが集まり、昭和47年（1972年）に水若酢神社二の鳥居復興奉祝として第一回

「隠岐古典相撲」が復活開催されたのである。以降、島内最大のイベントとして定着しているという。

「隠岐古典相撲」の詳細運営方法は、島根県文化センターが公開しているビデオ（第10回大会の様様。YouTube）に詳しい。以下にその特徴的な内容を記述してみる。

・地取りとやこい

地取りとは、大会に備えて各地域において毎晩のように力士たちが集い稽古すること。これによって、相撲に堪える体づくり、型の勉強も行われる。やこいとは稽古が終わった後の懇談のこと。地域の女性が準備にあたり、力士や関係者は賑やかに飲食し相撲談義が高揚する。これらは地域が纏まっていく過程でもある。

・土俵づくり

一方、「座元」では土俵づくりが進められる。土俵は「がしんたわら」と呼ばれる手作りの俵で「三重土俵」と呼ばれる独特の三重の土俵が作られる。そして、土俵の四方に四本の柱が建てられる。柱は「ぬき」で固定され、「すじ違い竹」で補強される。更に四本の柱にはそえ柱が付けられるのである。これらが終わると、土俵中央の穴に供え物を施す儀式が行われる。これを「土俵祭り」と証するが、これ以降土俵に土足で上がることは許されなくなる。

・相撲の取り組み

大会当日、各地域で出陣式を終えた力士たちが会場に集まってくる。いよいよ相撲取り組みの開始である。「座元」による神楽奉納、行司口上に次いで草結びと呼ばれる若手の取り組みから始まり、割相撲が何番も行われる。ここで特出すべきは、地域の応援団が地元力士に向かって大量の清めの塩をまくことだろう。この意味は不詳であるがとにかく大量にまくのである。相撲は中入りの休憩を経て夜を徹して続けられる。そして早朝、いよいよ三役力士の登場となる。正小結戦、正関脇戦、正大関戦が行われる。勝者には、賞品として土俵に建てられた柱が授与されるのである。そして、土俵上で力士たちは契りの杯を交わした後、勝者は地域の衆が担ぐこの柱に乗って凱旋するのである。

さて問題は、隠岐島に何故このような相撲の風習が根付いてきたかである。隠岐島といえば朝鮮半島にほど近い。古来、朝鮮半島からの先進文化や技術の渡来は、対馬・壱岐島経由の北九州ルートと隠岐島経由の出雲ルートが想定されている。とすれば、相撲の風習も朝鮮半島から隠岐島にそして出雲にもたらされたことが考えられるが果たしてどうであったか。以降において順次検討して行きたいと思う。

第一章 モンゴル相撲の歴史

日本における相撲については、「古事記」や「日本書紀」にその記述がある。詳細は後の章にて論述するが、記紀の記述の舞台になっているのは出雲である。そして前述のように、隠岐島に相撲の風習が色濃く残っていることから、どうも相撲は朝鮮半島からもたらされたものと考えてよさそうである。

朝鮮半島では「シルム」と言われる格闘技が行われており、それが日本の相撲の起源とする説もあるが、一般的にはその原点は高句麗古墳群の壁画に求められている。平成16年（2004年）に高句麗遺跡群の一つとして世界遺産登録された「安岳3号墳」に描かれている壁画は正しく相撲を表しているものと考えられるのである。壁面には357年という墓碑銘が残されているので、この頃高句麗で相撲のような格闘技が行われていたことが確認されよう。

高句麗は紀元前37年から668年に、中国東部の南部から朝鮮半島北中部に存在した。最盛期には満州南部から朝鮮半島の大部分を領土とした。三国時代には新羅や百済と朝鮮半島を割拠していたのである。この高句麗、しばしばツングース系民族によって建てられたと言われている。とすれば、それはモンゴル系ということにもなるのだが、いかがであろうか。

モンゴルには「ブフ」と言われる、古来より伝わる伝統的な格闘技がある。相撲に似ていることから日本ではモンゴル相撲と呼ばれる。モンゴル出身の大相撲の横綱白鵬の父親はブフの最高位アヴァルガ（横綱に相当）を張っていたことで有名である。

モンゴル国では、年に1度の民族の祭典である「国家ナーダム」が開催されており、その競技の一つにブフがある。「国家ナーダム」は毎年7月革命記念日に因んで首都ウランバートルの中央スタジアムで行われる。競技はブフ、競馬、弓射の3つである。（但し、競馬は別に競馬場で行われる）

この「国家ナーダム」を理解するには、もう少しモンゴルの歴史と習俗を紐解かねばならない。「ナーダム」はモンゴル各地で行われている。村祭りのレベルから地域大会、全国大会までであるという。そして「国家ナーダム」が最も華やかな大きな大会とされているのである。

では「ナーダム」とは単なるスポーツ大会ということであろうか。実は、「ナーダム」の原点には「オポー祭り」という古来から伝わるモンゴル人の信仰があるという。「オポー」とは、山や峠に土や石を円錐形に積み上げた構造物で、その基壇の上部に木枝を差し、中心に槍などを立てる。モンゴルでは、この「オポー」に天神地祇が降りてくると信じられているのである。毎夏の「オポー祭り」では牛馬の肉などを供え、五畜などの豊穰、息災などを祈り「オポー」の周りを巡る。その時、積石などを行うこともあるといわれる。そして、神様に喜んでいただくべく競馬・ブフ・弓射を奉納するのである。

この「オポー祭り」、中国・秦の時代の匈奴（紀元前4世紀から5世紀に中央ユーラ

シアにあった遊牧民族)の遺跡にブフが描かれており、匈奴の騎馬隊が秦國を大いに苦しめたことから、この頃既に競馬・ブフ・弓射といったことが行われており、これが匈奴の騎馬隊の強さの源であったことが類推される。更に、チンギス・カンのモンゴル帝国の時代は世界有数の機動力を誇った騎馬隊が有名であるが、競馬・ブフ・弓射は強靱蒙古軍の軍事教練とされていたとも言われるのである。

因みに、「ナーダム」とはモンゴル語で、ナーッド(集いて) ウム(競う・捧げる)ということらしい。

第二章 記紀と相撲

次に、日本国内に目をむけてみようと思う。相撲の起源として巷間すぐ引き合いに出されるのは、「古事記」の「国譲り」神話に登場する建御名方命と建御雷神の力比べの話と、「日本書紀」に記述される野見宿禰(のみのすくね)と当麻蹴速(たいまのけはや)の角力の戦いの話であろう。そこで、まずはこの二つのお話を復習しておこう。

・「国譲り」神話

「古事記」の記述。オオクニヌシの国作りで繁栄した葦原中国(出雲)を見て、天照大神は自分が治めるべき国と主張し、数々の使者を派遣するが悉く失敗してしまう。そして、最後に派遣されたのが建御雷神(タケミカヅチ)だった。一人の息子のヤエコトシロヌシは直ぐに恭順するが、もう一人の息子・建御名方命(タケミナカタ)は「力比べ」を申し出る。しかしながら、タケミカヅチの力は圧倒的でタケミナカタの手を握りつぶして体を投げ飛ばし、逃げ出したタケミナカタを諏訪の海に追い詰める。そして、タケミナカタはこの地を出ないこと約し、国譲りを承諾するのであった。

このタケミナカタとタケミカヅチの対一の戦いの話は極めて比喩的な物語で、一般的には何らかの戦いが行われたことと考えられている。そして、強い匈奴の騎馬隊のベースとなっていた競馬・相撲・弓射が高句麗を経由して出雲に伝わっていたと考えれば、タケミカヅチに敗れたと「古事記」に描かれるものの、当時有数の強い勢力であった出雲出身のタケミナカタ軍の強さの秘密が理解されるのではないだろうか。

尚、史実としての両者の戦いについては、本欄の小稿「国譲りは関東で繰り広げられていた」において一つの推論を示したのでご参照願いたい。

・野見宿禰と当麻蹴速

「日本書紀」垂仁天皇紀の記述。垂仁7年、大和に当麻蹴速という天下の力持ちがいることを知った垂仁天皇は、出雲国から野見宿禰を呼び寄せ角力(すまい)をとらせる。結果、野見宿禰が当麻蹴速のあばら骨と腰骨を踏み砕いて勝利し、天皇は蹴速の土地を

没収し野見宿禰に与え、仕えさせるのである。又、垂仁天皇の叔父・倭彦命が亡くなった時行われた殉死に心を痛めた天皇は、皇后・日葉酢媛の葬儀に際し別の方法はないか尋ねる。これに対し、野見宿禰が人馬の埴輪を作り殉死に替えることを提案、献上する。喜んだ天皇は野見宿禰を土師職（はじつかさ）に任命し、以降野見宿禰の後裔・土師氏が天皇の葬祭を司ることとなる。

次にこの二人の戦いであるが、こちらの場合は単なる二人の力比べとか両陣営挙げての戦争とかでは割り切れない。後に土師氏が古墳造営や葬送儀礼に関わってくるからである。とすれば、この力比べは古墳造営競争ではなかったかと思われるのである。古墳を造るには巨石を運ぶ怪力が必要である。そして、それを加工する技術が必要である。怪力を相撲に擬して著わした。腰骨を踏み砕くとは石の加工を意味した。野見宿禰の野見とは「ノミ」を意味するという一説もある位である。

さてここで、記紀に著わされる二つの記述を少し整理しておきたい。二つの記述に共通するのは、言うまでもなく出雲国に関わることと相撲に関わることである。そして、片やタケミナカタは武術に優れた神として描かれ、片やノミスクネは古墳造営や葬送儀礼に秀でた人物として描かれている。とすれば、匈奴に発した「オボー祭り」が高句麗を經由して隠岐の島、そして出雲に伝播してきたのではないかという推論が俄かに浮上してくるのである。そこで本章では次に、出雲に発した相撲が日本各地に伝播するルートが、それ以前に出雲族が覇権を主張して来たルートと共鳴するように重なってくることを検証してみたい。

・諏訪大社（下社）の「お舟祭り」

諏訪大社上社（長野県諏訪市）の祭神は建御名方命、下社（長野県下諏訪町）の祭神はその妻・八坂刀売神である。この下社では「お舟祭り」と呼ばれる祭神の遷座祭が行われる。二月から七月までを下社・春宮で過ごし、八月に下社・秋宮に遷座する。この時お舟と称する銚に乗って移動することから「お舟祭り」と呼ばれる。祭神が春宮から秋宮に着くと神楽殿を三周した後神殿に入る。この時に神相撲三番が奉納されるのである。実は、モンゴルの「オボー祭り」においても、祈りを捧げてオボーを三周するとされている。こうした儀式は、建御名方命が繁栄させた諏訪の地に出雲の後裔が伝えたものと考えられるであろう。

又、諏訪大社上社・本宮では毎年九月に「十五夜祭奉納相撲」が行われており、化粧まわしをつけた青年力士が古式ゆかしい相撲踊りを奉納する。尚、室町時代より伝わる諏訪大社の「諏訪大明神絵詞」によれば、祭事の終わりに流鏝馬十番、相撲二十番が奉納されていたとの記述があるという。

・唐戸山神事相撲

羽咋神社（石川県羽咋市）の例大祭で行われるのが唐戸山神事相撲である。羽咋神社の祭神は垂仁天皇の皇子・磐衝別命（いわつくわけのみこと）とされている。ご由緒によれば、祭神はこの地で仁政を敷き、力の優れた人を招き相撲をとらせて武勇を養い、体を鍛えさせて民から尊敬されたという。その遺徳を偲んで、祭神の命日に各地から力自慢の若者が唐戸山と呼ばれる相撲場に集まり神霊をお慰めしたのが神事相撲の始まりという。

石川県羽咋市には、能登国一宮・気多大社が鎮座する。祭神は大己貴命（おおなむじのみこと）である。とすれば、羽咋神社ももともとは気多大社の傘下にあったと考えた方が自然ではないだろうか。即ち、出雲系ということになるのである。

・八幡古表神社の神相撲

八幡古表神社（福岡県吉富町）には、ユニークな木彫り人形による神相撲が伝わる。神社の祭神が息長帯姫（神功皇后）で、鎮座は欽明6年（545年）とされている。神相撲の縁起としては、養老3年（719年）に大隈・日向の反乱があり、官軍・宇佐の神軍と共に御神像を掲げてこれを討った。天平16年（744年）に隼人の霊を慰めるため宇佐神宮が中心となって大放生会を執行した。この時、今また古を表わす木像を彫って広津港より船に乗って放生会に参加した。この縁起に因んで奉納されるのが、木彫りの神像（操り人形）による「細男舞」と「神相撲」なのである。

この縁起、相撲との連関の説明が今ひとつ十分でない。「神相撲」を奉納するからには何かの因縁がなくてはならないのである。とすれば、八幡古表神社はもっと古い時代から存在していたとされなくてはならない。本欄の小稿「記紀は魏志を描いていた」にて論じたように、出雲スサノオは豊前・豊後（宇佐など）・日向に進出してきていた。このような地盤があったから、出雲の後裔がこの地に相撲を持ち込んだものと考えれば良いのではないだろうか。

・井辺八幡山古墳の力士埴輪

井辺（いんべ）八幡山古墳は和歌山県和歌山市に残る。前方後円墳で6世紀頃の築造とされている。この古墳から注目すべき幾つかの埴輪が発掘されている。一つは、和歌山市立博物館に展示されている男子の立像埴輪である。腰に付けられた褌、前に突き出した両腕、どっしりとした下半身から力士像埴輪とされている。又、同志社大学歴史資料館には、馬形埴輪、弓と思われるものを担いでいる埴輪が展示されている。これらを考察すると、6世紀を遡る時期にどこからかから相撲と騎馬、弓が伝わって来ていたものと考えられるのである。

和歌山市には伊太祇曾神社が鎮座する。紀伊国一ノ宮で、主祭神はスサノオの子・五十猛命である。「日本書紀」によれば、五十猛命はスサノオと共に新羅に降りるがやがて出雲に移動し、木の種を捲いて国中を青山にするのである。そして、妹神と共に紀伊

国に祀られる。つまりは、五十猛命が出雲から進出してきた。その後、後裔が相撲文化を帯同してきて相撲をこの地に根付かせたと考えられるのである。

・角力取山古墳

角力取山古墳（すもうとりやまこふん）は岡山県総社市に残る。方墳で、築造年代は墳形から5世紀後半頃と推定されている。古墳名はかつて戦前には古墳の近くに土俵が据えられ、御崎神社のお祭りの時に奉納相撲が催されていたことによると言われる。しかしながら、現在はお祭りも絶え、土俵もなくなっているという。

この御崎神社は岡山県総社市地頭片山に鎮座する。古より美篁郷（かつての山手村三須村）の氏神にして地方最古の神社とされている。祭神はスサノオ、大国主命、少名彦名命の三柱である。そもそも総社市は備中国の国府所在地であり、古代吉備国の中心地として栄えた地域である。この地に、出雲系の神々が祀られていることから、古代に出雲からこの地に進出してきた人々がいたことを想像させる。古来、出雲と吉備は密接な関係にあったのである。

*山手村…明治22年に西郡村、地頭片山村、岡谷村、宿村が合併して山手村となる。
そして、山手村は平成17年に総社市に合併されている。

・御上神社の「ずいき祭り」

滋賀県野洲市に御上神社（みかみじんじゃ）が鎮座する。「近江富士」の別名のある三上山（標高432m）の山麓に在る。祭神は天御影命で、天照大神とスサノオとの誓約で生まれた天津彦根命の子である。神社の秋季古例祭は「ずいき祭り」と称され、古くは「若宮殿相撲御神事」と呼ばれていたという。鎌倉時代以前に始まったとされている。祭りではずいきで作った神輿五基が奉納される他、芝原式として子供相撲が奉納される。

野洲市には三上山の北方、大岩山丘陵とその周辺に大岩山古墳群があり、3世紀後半から6世紀にかけて継続的に築造されたものと言われている。この大岩山古墳群から都合24個の銅鐸が発掘されたのである。銅鐸といえば出雲が著名で、荒神谷遺跡（島根県出雲市）や加茂岩倉遺跡（島根県雲南市）から発掘されている。銅鐸は九州地区には殆ど発掘がないことから、銅鐸文化は中国か朝鮮半島から先ずは出雲に渡来し、そして各地に伝播したのではないかと考えられるのである。とすれば、当地野洲市にも古代出雲の豪族が進出してきたものと考えていいのではないだろうか。

さて以上の幾つかの事例により、出雲に伝わった相撲が各地に伝播した様子を記述した。これらは神社の祭事における神事相撲として現在に伝わっているものであろう。一方、奈良時代から平安時代にかけて宮中行事として「相撲節会」が行われるようになったことが記録されている。又、鎌倉時代には鶴岡八幡宮で「上覧相撲」が開催され、相

撲の他流鎗馬や古式競馬も行われたという。そして、江戸時代に入ると「興業相撲」が大いに発展したのである。しかしながら、本稿では相撲の起源を求めている。従って、その後の相撲の発展如何については今後の課題としておきたい。

第三章 四隅突出型墳丘墓と巨大神殿

四隅突出型墳丘墓というものがある。弥生時代中期（紀元前4世紀頃～紀元前後）以降、吉備・山陰・北陸の各地方で行われた墓制とされる。方形墳丘墓の四隅がヒトデのように飛び出した特異な形状の大型墳丘墓で、その突出部に葺石や小石を施すという墳墓形態である。県別分布では総数103基の内、島根県39基・鳥取県28基・福井県3基・石川県1基・富山県10基・広島県17基・岡山県1基・兵庫県2基・福島県2基と言われており、島根県が中心をなすようである。従来、広島県の三次市周辺が発祥の地と言われてきたが、昨今の発掘では青木遺跡（島根県出雲市）から紀元前1世紀頃の最古の型式の四隅突出型墳丘墓が出土したことより、やはり発祥は出雲とされているようである。

出雲といえば、荒神谷遺跡が著名である。1984年からの発掘調査で、銅剣358本・銅鐸6個・銅矛16本が出土している。銅鐸の製作時期は弥生時代前期末から中期中頃の間とされているので、紀元前3世紀から紀元前後ということになる。一方、四隅突出型墳丘墓は紀元前後から紀元3世紀頃の築造とされている。このことは、同じ出雲で発祥したが銅鐸祭祀と四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼は時代が重ならないことを示しているのである。別の言い方をすれば、銅鐸祭祀の集団の延長線上に四隅突出型墳丘墓の集団がないということかもしれないのである。

では、この四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼は誰が出雲にもたらしたのであろうか。考古学の重鎮・大塚初重氏は、積石塚が四隅突出型古墳の原形ではないかという説を唱えておられる。そして、その故知は朝鮮半島北部（高麗）と推定、高麗から海を渡って出雲にやってきて四隅突出型古墳として発展し、北陸はじめ各地（長野県長野市大室・松本市里山辺・群馬県高崎市長瀬西・山梨県甲府市桜井横根など）に広まっていったのではないかとされているのである。

しかしながら、積石塚は出雲を経由しないで伝播したケースも考えられるので、積石塚だけでは判断できないことは付言しておく必要があろう。

さて、本稿ではモンゴルの「オボー祭り」（相撲）が、高句麗を経由して隠岐島から出雲に上陸してきたことを記述した。そして、出雲から日本各地に伝播していった模様を記述してきた。この伝播のプロセスは四隅突出型墳丘墓の伝播と結構重なるのである。では、「オボー祭り」と四隅突出型墳丘墓は何か関係があるのであろうか。

本稿では、「オポー祭り」においてオポーを回って祈りを捧げる時積石を行う風習があることを既述した。では、積石塚の積み石は何ゆえにそのような事が行われるのだろうか。それは尊き人を葬送する時に、参列者が祈りを込めて石を積むということではないだろうか。突出四隅型墳丘墓においては、四隅突出部に葺石や小石が施されることを既述した。これこそ積み石の跡と考えていいのではないだろうか。

出雲弥生の森博物館(島根県出雲市)には四隅突出型古墳(西谷3号墓)のジオラマが館内に展示されている。そして、ジオラマでは紀元2世紀頃築造されたと考えられる西谷3号墓に埋葬されたであろう王の葬儀の様子が再現されているのである。古墳上部中央に棺が埋葬される。そして、それを囲むように四本の大きな柱が建立されつつあるのである。

西谷3号墓では、大きな土壌の底に棺を置いた後、その上に4本の巨柱を用いた施設が建てられていた。又、棺の真上には朱のついた丸い石がご神体のように置かれていた。その上には200個にもものぼる土器が出土した。これらのことから、築造した古墳の上では、亡き王を埋葬した後4本柱の施設を建て、中央に置いた赤い丸石を敬いながら多くの参列者が飲み食いをしてきたものと推論されているのである。

さてこの西谷3号墓のジオラマであるが、大きく三つのことを語りかけているのではないかと思うのである。一つは言うまでもなく四隅突出型墳丘墓そのものである。これには積み石が施されている。これは原点にモンゴルの「オポー祭り」があることは既述のとおりである。二つ目は、大きな土壌の底に棺を置いた後、その上に4本の巨柱を用いた施設が建てられていたことである。この施設の設置は何を意味するのであろうか。実はこの4本の主柱の脇には4本の副柱の穴が発掘されている。そして、それは主柱を支える添え柱と考えられているのである。このような強固な作りから考えて、この施設は葬送用の一時的なものではなく、恒久的なものと考えられるのではないだろうか。三つ目は、200個にもものぼる土器が出土したことから築造した古墳の上では中央に置いた赤い丸石を敬いながら多くの参列者が飲み食いして葬送していたのではないかとされる点である。では、葬送の儀礼は単なる飲み食いでは終わっていたのであろうか。どうもそれだけでは想像力が足りない気がするのである。

以上の検討から降りてきた驚きの結論は、次の三点であった。

①四隅突出型墳丘墓上に4本の巨柱で建立されたのは高層神殿だった。②四隅突出型墳丘墓は相撲の土俵の原形である。③葬送儀礼で行われていたのは相撲である。

では次に、以上三点を推論する理由について記述していきたい。

①四隅突出型墳丘墓上に4本の巨柱で建立されたのは高層神殿だった。

稲吉角田遺跡(鳥取県米子市)から出土した土器に高層神殿が描かれていた。そして、上部に上る梯子も描かれていた。それは、島根県立古代出雲歴史博物館(島根県出雲市)に復元・展示されている古代出雲大社の巨大本殿の模型の原形をなすものであろう。この巨大本殿は、平成12年(2000年)に出雲大社境内から発掘された「宇豆柱」がその史実性を証明することとなったのである。

稲吉角田遺跡は弥生時代中期、紀元前1世紀頃の遺跡といわれる。そして出土した土器には、集落の中央と思われる場所に銅鐸と祭殿が描かれており、少し離れた位置に梯子が架けられた高層神殿が描かれている。又、周辺には自然界を代表して鹿が描かれ、集落に向かって船が漕がれて、太陽が射し輝いているといった風景である。この高層神殿こそ地上界と天上界を繋ぐランドマークだったのではないだろうか。この土器に描かれた集落の風景は、近在の有力遺跡の祭祀を描いたものであろうとする説が有力である。とすれば、紀元前1世紀頃(銅鐸時代)に山陰地域では高層神殿を建立して祭祀が行われていたということになる。

そして、そこに四隅突出型墳丘墓の文化をもつ集団が移住してきてその文化を定着させた。山陰地区を中心に四隅突出型墳丘墓が広く分布するのは良く知られるとおりである。中でも西谷3号墓のような大型の墳丘墓は、有力豪族(王族)のものと考えられる。一方、有力豪族(王族)はそれまで高層神殿を造築して祭祀を司っていた。とすれば、西谷3号墓に残る巨柱跡は、そこにランドマークとして高層神殿が設置されていたことを示すものと考えていいのではないだろうか。

②四隅突出型墳丘墓は相撲の土俵の原形である。

この推論のヒントになったのは、「角力山古墳」の名称の所以に古墳の形状(方墳)にあるとする一説である。四隅突出型墳丘墓は巨大であるが、台形の台地は縮小すれば殆ど相撲の土俵と同形である。そして、台形の上に4本の柱を建てる様は正しく「隠岐古典相撲」における土俵づくりと同様のものと言えないだろうか。しかも「隠岐古典相撲」では、四隅突出型墳丘墓における副柱まで付けられているのである。又、墳丘墓の中央には棺の真上に朱い丸石がご神体のように置かれていたというが、このことが「土俵祭り」で土俵の中央に穴を掘り供え物を埋める儀式の原形ではないだろうか。

又、先述の「唐戸山神事相撲」が行われる場所はすり鉢状の地形の中央に土俵を設けた、日本最古の野外相撲場(羽咋市南中央町)といわれているが、一説によれば唐戸山の土を掘って磐衝別命の御陵を作ったからすり鉢状になったと言われている。とすれば、この地の界隈にミコトの御陵が築造され、そこが土俵とされ相撲が奉納されていたものとも考えられるのではないだろうか。因みに、宮内省により治定されているミコトの古墳は羽咋神社(羽咋市川原町)境内にあるが、築造が5世紀頃とされており、垂仁天皇の皇子の墓としては時代が合わないものと思われるのである。

③葬送儀礼で行われていたのは相撲である。

①と②から類推されるのは葬送儀礼の時行われていたのは相撲ということではないだろうか。モンゴルでは「オボ一祭り」の時、神様に喜んでいただくべく競馬・ブフ・弓射を奉納することを先述した。四隅突出型墳丘墓の葬送儀礼における神様とは葬送される王家の崇められた人だった。そして、神様に喜んでもらえるよう相撲を奉獻したものと考えられるのである。

先述した高句麗古墳群の相撲壁画は、高句麗で相撲が行われていたことを示すと共に、葬送儀礼として相撲が行われていたことをも物語るのではないだろうか。そして、日本各地の神社の例大祭などにおいて相撲が奉納されていることから、神社と相撲は切り離せない関係にあるのは明白な事実である。その理由を尋ねれば、上記のことに行き着くのは極く自然のことではないだろうか。

因みに、羽咋神社の例大祭は9月25日に行われ、その中で唐戸山相撲神事として唐戸山相撲場で相撲祭が開催される。一方、羽咋神社の旧別当寺である本念寺（羽咋市川原町）では9月23日から26日にかけて、「羽咋の法事」と呼ばれるミコトの法要などが古来営まれてきているのである。

大谷大学名誉教授の山田知子氏がNET上に「我が国における相撲の発生に関する研究」という論文を掲載されており、その中に「唐戸山神事相撲」について言及されている箇所がある。山田氏によれば、“「唐戸山相撲神事」の相撲場は大きな摺鉢型の窪地である。羽咋神社の祭神は垂仁天皇の皇子・石衝別王であり、側にその陵墓といわれる古墳がある。窪地の相撲場を唐戸山と呼ぶことについては、「唐戸」は唐櫃のことで死者を入れる棺のことを意味し、又「山」も死者の世界を意味するので、もとは古墳のことを指したのではなかったかと思われる。”“9月25日は石衝別王の命日にあたるとされてきていることから考えても、この相撲も陵墓で行われて来た相撲の一つの例としてみることが出来るであろう。”と述べられている。

終章 出雲の崇りを鎮める

古墳時代は日本の歴史の時代区分の一つである。縄文時代、弥生時代に次ぐ考古学上の時代区分であるが、古墳でも特に前方後円墳が盛んに築造された時代を言うのであろう。3世紀半ば過ぎ頃から6世紀末頃とされる。この古墳時代の幕開けに伴うように出雲では四隅突出型墳丘墓が築造されなくなり、出雲地方においても前方後円墳が築造されるようになっていくという。本章ではこの謎について検討してみたいと思う。

古墳時代の前、弥生時代後期頃（紀元前後から紀元3世紀）は「魏志倭人伝」で記述されるように倭国が大いに乱れた時期だった。そんな中でも、九州勢力と出雲勢力そし

て大和勢力が覇権を争っていたのではないかと考えられる。そして、邪馬台国九州説では邪馬台国が九州にあり、これが大和に東遷するという考えが主流をなす。又、邪馬台国畿内説では邪馬台国を纏向遺跡（奈良県桜井市）に比定して、覇権を拡大すると主張する。いずれの場合でもクリアしなければならない難問がある。それは、出雲オオクニヌシの要求した巨大神殿の扱いと崇神天皇の時代に流行った疫病と出雲オオモノヌシを祀ったことで疫病が終息したことの意味である。

この二つのことに共通するキーワードは「出雲を鎮める」ということだと考えられる。では、何のために出雲を鎮める必要があったのか。それは出雲を駆逐するために相当酷いことが行われたことを示唆している。それは単に大量殺戮が行われたというようなことではないだろう。倭国大乱の時代、戦争による殺戮は各地で起こっていただろうから、それほど特筆するようなことではなかったものと考えられる。とすれば、それは多くの民を纏め、尊敬を集めていた出雲王家を断絶し祭祀を断絶するために行われた王族一党の処刑だったのではないかと想像されるのである。そのため、それ以降出雲や出雲王家の影響下にあった山陰地区などでも、四隅突出型墳丘墓が築造されなくなるのである。

（この件に関しては、歴史作家・関裕二氏が「古代史謎解き紀行Ⅱ」において、出雲国造の「身逃げの神事」について記述する中で、大国主神の暗殺の故事について言及しておられるので、興味のある方は参照されたい）

出雲の崇りのその一、崇神天皇時代の疫病の流行は史実性があるのだろう。だから、「古事記」の編者たちはそのことを記述せざるを得なかった。何故なら、疫病が出雲の崇りという噂が流布していたからだろう。しかしながら、「古事記」ではおぞましいその理由までは記述できなかった。「古事記」の記述は、崇神天皇がオオタタネコに命じて、三輪山の神オオモノヌシを祀らせた。すると疫病は収まり国に平和に戻ったということだった。

出雲の崇りその二、垂仁天皇の物言わぬ皇子（ホムチワケ）の話も史実性を感じる。皇子・ホムチワケが言葉を喋れないのは、占いの結果出雲の神・オオクニヌシの崇りと分かった。それで、垂仁天皇はオオクニヌシのお告げどおり、出雲に大きな宮を造り修めた。すると、皇子は突然言葉を話し始めた。「古事記」は記述するのである。

この垂仁天皇が造った「出雲の大きな宮」こそ出雲大社の起源と考えられる。先述したように、山陰地区では高層神殿が築造されていた。そして、有力豪族（王族）の四隅突出型墳丘墓には高層神殿が建てられていた可能性がある。こうしたことから、垂仁天皇が造った「出雲の大きな宮」はそのような流れを汲むものと考えられるのである。

諏訪大社（長野県諏訪市・茅野市・下諏訪町）に伝わる「御柱祭り」。6年毎の式年遷宮の代わりに御柱を建てて神殿の建て替えに見立てているものと考えられるが、この御柱の建立は西谷3号墳のジオラマで4本の柱を建立している姿と重なってこないだ

ろうか。

また過日「宇都宮二荒山神社」（栃木県宇都宮市）を訪ねて驚愕したことがある。この神社、小高い丘の上に造営されているが、正面の鳥居から長い階段がありその上に神殿が厳かに鎮座しているのである。それが、島根県立古代出雲歴史博物館に復元・展示されている古代出雲の巨大神殿そのものに見えるのである。

垂仁天皇が残したもう一つの事績に前方後円墳があるものと推論する。前方後円墳の起源については様々な仮説が唱えられている。円形墳丘墓の周濠を掘り残した陸橋部分（方形）で祭祀が行われていたとする説や、円部は男王の墓で方部は祭祀を行った女王の墓に由来するとする説などがある。現在の研究では、後円部が埋葬のための主丘で前部の方形部が死者を祀る祭壇として発生・発達したとする説、また方形部は後円部にいたる墓道とする説が有力視されている。

しかしながら、古墳時代を通じて前方後円墳だけでなく、円墳や方墳も築造されていたことに注意が必要であろう。円墳や方墳の発展形が前方後円墳と考えにくいからである。そこで、想起されるのは垂仁天皇が招聘した野見宿禰の話である。この話、そもそも謎に満ちている。大和政権（崇神朝）が出雲を駆逐したとしたら、何ゆえに駆逐した出雲から野見宿禰を招聘しなくてはならなかったのか。その答えは贖罪ということになる。垂仁天皇による贖罪その一が「出雲の大きな宮」の建立とすれば、野見宿禰の招聘と古墳造営の命令が贖罪その二ではなかったか。そして、古墳造営を命じられた野見宿禰は当時造られていた円形墳丘墓に出雲の四隅突出型墳丘墓を合体させたのである。そのように発想することで、野見宿禰は四隅突出型墳丘墓を継承させたのではないだろうか。

野見宿禰の史実性は不詳である。不詳ではあるが、時の政権が何らかの力士集団や石工集団・土部集団を出雲から招聘して、新しいスタイルの墳丘墓を構想させた可能性があるのではないだろうか。そして、出雲の墳丘墓の形式を継承させることで、出雲に残る勢力の懐柔策をも企図したのではないだろうか。

本稿第二章において、野見宿禰と当麻蹴速の相撲の戦いは古墳造営の戦いではなかったかと推論した。一説によれば、当麻氏も葬送儀礼に携わっていた一族といわれるのである。天下の力持ちが葬送儀礼を職としていたとなれば陵墓の造営をしていたということになる。ここにおいて、野見氏と当麻氏の古墳造営の競争の推論が現実味を帯びてくることになる。そして又、野見氏が新しいスタイルの陵墓を造営したという推論も的を外していないということになるのではないだろうか。

因みに、前方後円墳の特性といわれる埋納品（鏡、剣など）は北九州起源、墳丘を葺石で覆う築造方式は四隅突出型墳丘墓の出雲起源、墳丘上に配置される特殊器台形埴輪は吉備起源とされるが、円形と方形の結合については特定地域に起源を求めるのは難しいとされている。しかしながら、本稿の推論によれば円形と方形の結合についても特定

地域（出雲）に起源が求められることになるのである。

宮内庁は垂仁天皇の皇后・日葉酢媛命の陵を佐紀山陵古墳（奈良県奈良市）に治定している。佐紀山陵古墳は前方後円墳である。前方後円墳となると、野見宿禰による築造がクローズアップされる。そして、野見宿禰は日葉酢媛命の墓に人馬の埴輪を献上したのだった。しかしながら、この古墳は築造時期が4世紀末頃と見られていることから、垂仁天皇の時代とは時代が合わないのではないかと思われるのである。とすれば、佐紀山古墳に眠るのは日葉酢媛命ではないかもしれない。或いは、この古墳の築造時期の推定が誤りかもしれないということになる。

了

<あとがき>

本編では「女人禁制」問題に言及する場面がなかったが、色々調べたところ、どうもこの問題は当時相撲界に影響力のあった、百円札の肖像画が懐かしい板垣退助氏の発言が影響しているらしい。当時、板垣氏から相撲界改革に関して幾つかの提言があった。そして、その一つに「女性が取っ組み合う様子が野蛮で文明開化ではない」というものがあり、これが大きく影響したらしいのである。従って、伝統とかしきたりとかということではないらしいのである。とすれば、日本相撲協会の「識者の意見を聞く」とか「男女市民の意識調査を実施する」というスタンスは当を得ているものと思われる。因みに、本稿の推論において四隅突出型墳丘墓上で葬送儀式として行われた「相撲」には、出雲王族の女性たちも参列して上覧していたはずであることを付言しておきたい。